

「白バラは死なず」上映にあたって

国中に反対の波が立って、皆が呼応し、協力するなら
最後の強力な一撃によって独裁をたおせるのだ。

映画の冒頭のテロップです。1942年、ナチスの支配するドイツで、ミュンヘン大学の5人の学生と、哲学教授フーバーは「白バラ」と名付けた通信を発行し、反ナチの抵抗を呼びかけました。この文は、その2号目の中にあるものです。5人の学生はすべて20代前半の若者たちであり、ドイツ人の内部から、自発的に反ナチの声を上げたのでした。そして、ナチ当局の執ような追跡の前に、捕えられ、裁判にかけられ、処刑されたのでした。処刑されたのは、以下の人たちでした。

ヴィリー・グラーフ (医学専攻学生)	25歳	1943年2月25日	処刑
クルト・フーバー (心理学・哲学教授)	49歳	1943年7月13日	処刑
クリストフ・プロープスト (医学専攻学生)	23歳	1943年2月22日	処刑
アレクサンダー・シュモレル (医学専攻学生)	25歳	1943年7月13日	処刑
ハンス・ショル (医学専攻学生)	24歳	1943年2月22日	処刑
ゾフィー・ショル (生物学専攻学生)	21歳	1943年2月22日	処刑

映画「白バラは死なず」は、この歴史的事実をもとに、ミヒャエル・フェアヘーヘンが、14年に及ぶ資料、証言の採集の上に1982年に作った作品です。

ショル兄妹たちは、ユダヤ人や「障害者」虐殺、侵略、自由剥奪といったファシズム体制に妥協することなく自らの意志、考え、スタイルで、ナチスに抵抗した、普通の人々でした。彼らは、ヒトラーの第三帝国を、ひいては、それを構成しているドイツ民族、そして、自分自身の在り方を、問い、弾劾したのでした。

映画は、こうした彼らの動きを忠実にたどることによって描き出していますが、同時

に、このような時代にあっても、尚、若さを楽しむエネルギーを持った主人公たちも描いています。

映画「白バラは死なず」はこれまでにない秀れたレジスタンス映画であり、同時に、秀れた青春映画にもなっています。それは時代に抹殺された青春の悲しみがあるからではなく、時代を深く見つめる精神の自立があるからだと考えます。

*** 映画の理解のために ***

今日、私たちからみて意外なことが、当時は現実でした。そこで、映画が描いた時代の理解のために、いくつかの点を書き留めたいと考えます。

ミュンヘンはナチス発しょうの地であり、当時、大学も完全にナチスの支配下にありました。構内には、カギ十字のナチス旗が掲げられ、学長や教授のほとんどがナチス党员であり、学長は軍服姿で映画に登場しています。地下運動を続けるハンスらも周囲の目をくらすために「ハイル・ヒトラー」のあいさつをする演技が、時代の重々しきを感じさせます。

大学内に、学生中隊（兵役）が組織され、男子学生に日常約な点呼があり、軍事教練が課せられていました。これは大学で学業を継続するための前提であり、女子学生には勤労働員がありました。ハンスたちは、医学実習の見習のため、東部戦線へ在籍のまま派遣され、そこで、うわきで聞いていたユダヤ人虐殺の場面に遭遇します。又、ゾフィーは工場動員され、ロシア人の捕虜に出会います。

ゾフィーの恋人・フリッツは、国防軍人でした。ただ軍人の全てがナチ党员であったのではなく、フリッツは違いました。さらにシオル兄妹の父は、反ナチの言動で、当局に逮捕され、裁判にかけられ禁固刑になります。その父に面会に行くシーンがあります。

・・・以上のべてきたことはほぼ完全に歴史的事実です。これらは現在、翻訳されて手に入る「白バラ抵抗運動の記録」(未来社)などで、その全体像を知ることができます。

当時、紙は配給制であり、切手を手に入れるのも大変な苦勞を要しました。印刷機を手に入れることなど、本当に大変なことであったはずですが。紙を苦心して手に入れる場面や、ナチ党员に変装し（バッチをつけ）あやしまれずに切手を買う場面、こわれた印刷機を修理する場面などは、スリリングであると同時に痛快です。これらはフィクションであるかもしれませんが、当時は、十分にあり得る真実です。

*** 自主上映にあたって ***

この映画「白バラは死なず」は、太きな感動と共感を呼ぶと同時に、私たちの今日の日本の在り方を様々に考えさせられる作品と考え、自主上映を企画しました。

今年、国際平和年、各地で様々な行動がありました。私たちはもう一度、平和の意味を問い返す時期にあると考えます。そして私たちの周囲にある由由や、人権を妨げていく動き、戦争への布石を、確実に摘みとっていかねばならないと考えます。

この作品を生んだ西ドイツのワイツゼッカー大統領は、昨年、敗戦40周年を記念し、ドイツの犯した戦争犯罪に思いをはせ、

「過去に目を閉ざす者は、給局のところ、現在にも盲目となります」と説きました。

一方、私たちの国には、過去の侵略に目を覆わせ、教科書の書き直しをさせては、隣国の抗議をあげ、強制連行した韓国人・朝鮮人の人権をいまだに差別し続けている現実があります。「国家機密法」案の再上程は、「白バラは死なず」の画いた時代を想起させます。

私たちは、今、本当に自由なのだろうか。暗い時代にならぬために何をすべきなのか。謙虚に、歴史を問うことにせまられています。

ファシズムの時代を生き、マルチン・ニーメラーという牧師はこう言っています。

「ナチが、共産党を攻撃したとき、自分は少し不安だったが、とにかく自分は、共産主義ではなかった。だから、何も行動には出なかった。

次に、社会主義者を攻撃した。自分はさらに不安を増したが、社会主義ではなかったから、何も行動には出なかった。

それから、ナチは学校、新聞、ユダヤ人等々と攻撃の輪を広げていった。自分は、そのたびにいつも不安を増したが、それでも行動に出ることはなかった。

それから、ナチは教会を攻撃した。自分は牧師だった。だから行動に出たが、そのときは既に遅すぎた。」

1986.12.6 「白バラは死なず」を観る会



Information

- * 自主上映資料集 「白バラは死なず」を観る会編 200円
(白バラのビラ全文、シオル兄妹等のプロフィール、当時の年表、公判資料、参考文献等をまとめました)
- * 映画雑誌シネフロント「白バラは死なず」特集 400円
(シナリオ全文、映画批評等が出ています)

これらは上映会場にて販売しています。ご利用下さい。